



圓先大師傳

四十五之六





法然上人行状畫圖第四十五

勢觀房源智八備中守師盛朝臣乃子小松の

内府重盛の孫なり平家逆乱の後世れりか

ありて母儀これをもろゝてわをるは建久

六年生年十三歳のとき上人に進と上人

これを慈鎮和尚に進とてまよたり此門室よ

あして出家をこげをわぬいく程たつて上人の

禅室よ歸系し常随給仕首尾十八箇年上人





隣愍覆護他よ。くくく。浄土此法門を教示。  
圓頓戒。此人をえらして附屬く。強。強よ。ありて  
道具本尊房舎聖教の。こる所た。く。こ。ま。は。紙  
相兼て。れ。ま。と。人。終。焉。此。期。ら。く。い。ま。強。く。  
勢。觀。房。念。佛。の。安。心。年。來。御。教。誠。よ。あ。づ。ま。と  
い。く。も。た。ま。を。御。自。筆。に。肝。要。の。御。所。存。こ。み。て  
あ。と。ご。ま。れ。て。た。ま。わ。り。て。の。ら。れ。御。の。見。り  
それへ侍。人。と。申。され。た。ら。ま。さ。く。御。筆。を

そめ。れ。を。の。状。云。の。為。く。我。朝。ま。ろ。く。乃  
智者。た。ら。れ。さ。く。く。申。ら。る。觀。念。の。念。よ。も  
あ。は。は。又。學。問。し。て。念。佛。此。心。を。さ。ら。り。な。ご。て  
申。念。佛。よ。も。あ。は。は。た。は。往。生。極。樂。れ。ま。め。に。い。  
南。無。阿。彌。陀。佛。と。申。て。う。ご。ひ。た。く。往。生。す。  
う。と。た。ま。を。い。ら。り。て。申。ほ。う。よ。い。別。乃。子。細。さ。り  
は。は。た。く。三。心。四。修。な。と。申。と。れ。儀。い。變。定。し。て  
南。無。阿。彌。陀。佛。よ。て。往。生。す。と。と。た。り。ま。ら。に



いさか供なり。此はたわらぬまゝに後存せし  
二尊れあいまこころよらづれ本願よとれ供あり。  
念佛を信ぜん人たこひ一代の法をよしく  
学ばりこそ。一文不知れ愚鈍の身になりて尼  
入道の無智れともが。同じて。智者なり。  
まひをせほしく。一向念佛とへ。と云  
や。さ。御自筆れ書也。ま。こ。に。末代の飛  
鏡よたれ。もの。と。人。の。一。枚。消。息。と。な。ら。ん。と。

世も流布す。ま。ま。た。り。と。人。御入滅の後。賀茂  
れ。ほ。ら。り。け。い。ま。野。と。い。ぬ。と。ろ。よ。す。と。強。々。り。  
その由来。と。人。の。御病中。よ。い。げ。く。わ。ら。や。ま。  
た。く。車。を。よ。す。り。事。あ。ら。り。貴女車。よ。り。  
た。り。と。人。よ。謁。し。た。ま。ふ。た。ら。り。看。病。乃  
僧衆。あ。ら。い。あ。ら。は。南。よ。た。ら。い。て。あ。ら。い。  
休息。し。た。ま。う。て。ぢ。ぢ。勢。觀。房。一。人。障。子。れ  
は。う。て。ま。う。強。々。れ。と。女。房。れ。と。よ。て。い。ま。



まづ〜とこそなりいたまふに御往生の  
ばきて侍らんこそ無下むげに心なごく侍り  
ても念佛の法門なと御往生れちよふに  
よう申をうれ侍らんと申はるもいと人こ  
びなく源宣の所存せんきよのせ侍り。おれ  
たぐい源申さんせれと源宣の義をいし  
あふに侍り侍り。と云ふのくちまづ〜御の  
かよりありて入るは源とれと氣色たるびとも

にがえざりも利はるは僧衆たるとへり  
まゝいまわたりはれと勢觀房ありはる車は行  
おぼつれくはがえてをひはきてといまんと  
〜源よ河原へ車をやらひ〜と此をいして  
ゆき。かまはるに見えはれにあり  
あや〜まき事なごりなり。くはと今客の  
貴女たまへよう侍らんこそとつひ申はれま  
あれ〜を章提希夫人よ賀茂の邊よたり



中流たりや信く此方なり。此事未代りば。  
はるしくかぬ程よたほ好るうきを侍れども。  
らく解脱上人明恵上人たともかやう此奇特  
たやく侍るなり。此上人いやすう宿老よて  
行徳をたけ三昧をも發得せりて侍れん  
權化のより故ありつたまひん事たごるくよ  
そく流勢觀房も此ありこれ不思議を感  
見せり此方より上遷化の後社壇より

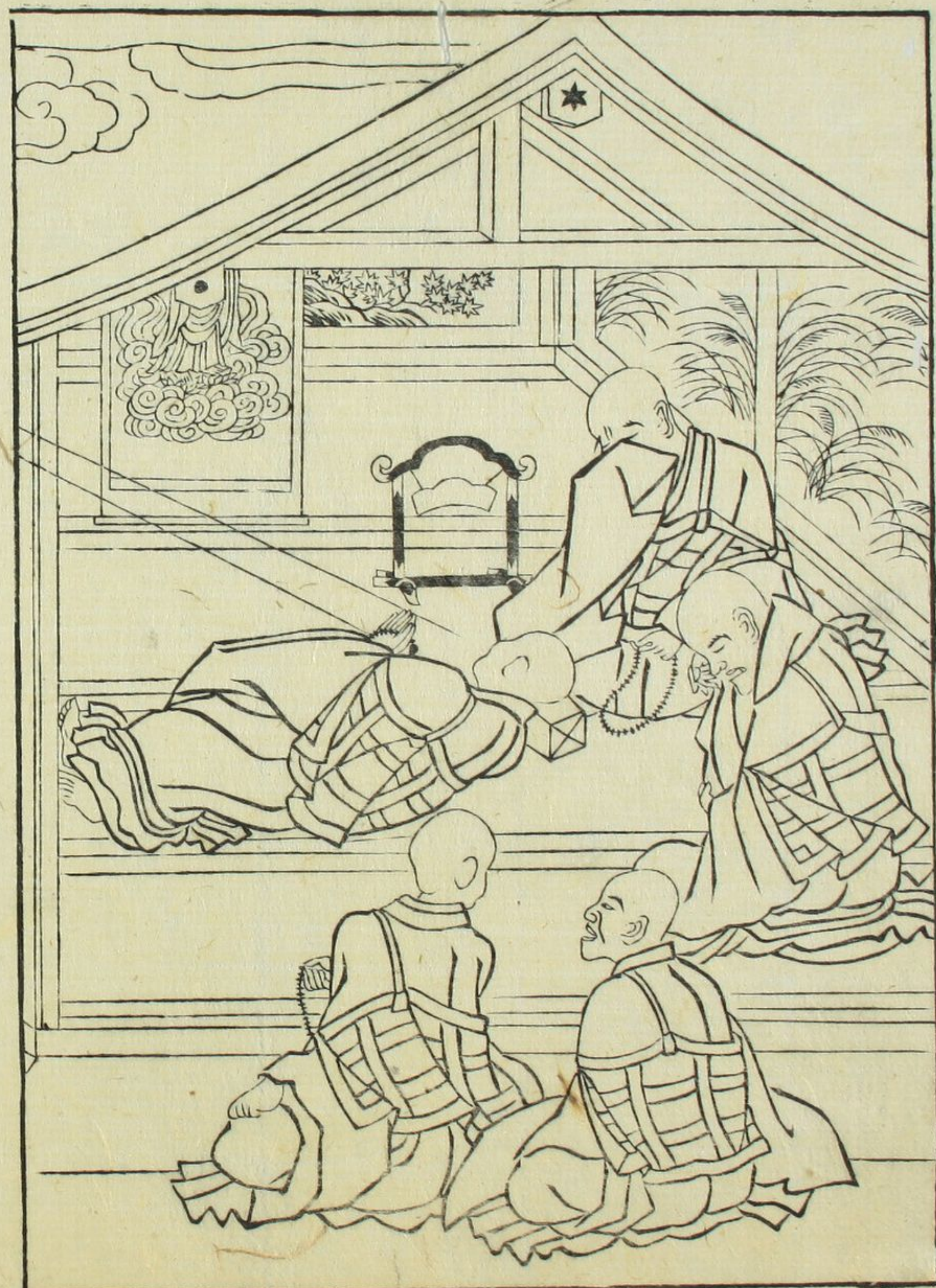
く居候志めてついに素詣をせんせり此  
方勢觀房一期の行状も隠遁をこせ  
自行を本らすをのびう法談たこりて  
らきてを所化五六人よりたやくたれ魔縁  
きをひたりんごりくごらるるれたそ  
志る。生年五十六。曆仁元年十二月十二日。頭比  
面西より念佛二百餘遍。最後よ一陀佛此  
二字よりきこえて息絶給よら。功德院賀





神宮 堂也 其廊よてをらわ 殆め 佛前より 異香薫  
トて 臨終所まんとらうよいし こそ けし ころ さら けよ かい  
ナドク 數日 さいえざり ちわ







遠江國蓮華寺に禪勝房は天台宗を習学しけり。  
自身に器をくくるに。され教よりありて。順次り  
生死をいへん事。いふよもあらがて。わづらえ  
るれん。熊谷に入道念佛往生のじひ候なりん  
たふよりをきつて。の祈よきうひぬまぬ。  
禪門より教訓をくくつてのら。ぐりつま事い。  
り。師法然上人よ。たづひ申はるへし。やうて  
巖法をあらへり。と浴し。吉水に西房に

まゝりて。無智に罪人の極樂浄土よ往生す候  
事。れ候なる候。うけたまふ。んと申はれし。  
上人に。れをい。とれ極樂あり。にてたり。  
ち。す阿弥陀佛。と。た。に。事。を。志。ぬ。罪。人。を。れ。  
諸佛菩薩も。捨ら。て。られ。十方に。浄む。よ。も  
門を。さ。さ。た。ら。も。う。げ。候。候。と。し。と。た。け  
す。くりん。とい。ぬ。願。を。わ。り。て。十。方。世。界。に。衆。生。候  
来。迎。し。た。ま。ふ。佛。よ。う。う。く。ぐ。り。お。ま。い。り。と







これいざなり。不審なる事どもを返たつて申  
くつに川まゝと上人御返答此條と

一自力他力に申事いふやうに心得侍へまこと  
上人のたまひく。深定いひぬらひりき邊國乃  
出民ならざるく昇殿とべき器よあゝひらも。  
とらりめはまゝうは。二度まゝて殿上へま  
いとたもき。これまゝとたゞと上れ御らう経  
たりの。これ定よ。極重悪人無他方便れ丸まひ。

うけて報身報土の極樂世界へまゝいゝまき器  
よいあゝひらも。阿弥陀佛の御らうたれん。  
稱名乃本願よとて。来迎よあづらん事  
たつたの不審うあづまき。わが力れけをりく。  
無智れ者たれん。いゝ往生をこげん極と  
疑るらゆ。まゝにうゝらんまれい。いま  
佛の願をまゝとるまれわ。くのまき乃  
罪人をすくりんため乃本願なり。此名号を



唱<sup>うた</sup>へたり。ゆえにくさくさ事あるへん。次  
十方衆生れ願の中よ。有<sup>あ</sup>智無<sup>む</sup>智。有<sup>あ</sup>罪無<sup>む</sup>  
罪。善人悪人。持<sup>ぢ</sup>戒破<sup>ぱ</sup>戒。男子女子。乃至三寶  
滅<sup>めつ</sup>盡<sup>じん</sup>の。後<sup>ご</sup>れ百<sup>ひゃく</sup>歳<sup>さい</sup>の。あひびごえ衆生よりてえ。  
もあ事あり。これ三寶滅盡の時れ衆生ハ  
命<sup>めい</sup>れたり。六十歳たり。戒<sup>かい</sup>定<sup>ぢやう</sup>惠<sup>ゑ</sup>の三学。その  
名<sup>な</sup>をぶいよさきう。此<sup>こ</sup>といへり。これくさる衆生  
まへも念佛せよ。来<sup>き</sup>迎<sup>むか</sup>よ。願<sup>がん</sup>ありと知<sup>ち</sup>り。これ

り身すくえ。えんへんといぬ事。をいひ心得  
出<sup>で</sup>たり。あやた。極樂れ。祇<sup>ぎ</sup>がう。か。これ。此。  
念佛の中。これ。げんごら。往生れ。さうと  
た。へん。念佛よ。これ。ま。い。無量<sup>むりやう</sup>れ。た。い。後  
失<sup>し</sup>る<sup>く</sup>ま。人<sup>にん</sup>れ。念佛よ。い。さ。あ。い。無邊<sup>むへん</sup>の  
ら。ら。を。ひ。く。る。ま。人<sup>にん</sup>れ。相<sup>あ</sup>構<sup>く</sup>て。願<sup>がん</sup>往  
生<sup>じやう</sup>れ。よ。して念佛を相<sup>あ</sup>續<sup>じやく</sup>と。へ。ま。れ。我<sup>われ</sup>ら。ら  
よ。て。い。れ。ひ。も。ち。ま。罪<sup>ざい</sup>人の念佛と。ら。ゆ。へ。



本願に乗じて極樂へまいるを他力願とも  
超世願ともいぬなり。案内をまゝらば人の  
機はうごいて往生でさるなり。道心者智者  
かどの念佛して往生し給らばあけとま  
罪滅のまじらば。文字をまゝにまゝらばん  
これ念佛申さくも。往生不定なりと疑  
ものは。本願の善悪機をひいてたう  
給らばといぬ事をまゝらばぬなり。先世業に

しよてしよれたる身をい。今生れ中にあは  
ためたを治事なり。はれたる女人の男子と  
たんとたれまゝなり。今生れ中まゝらば  
るまゝなり。念佛の機をまゝらばしよれたる  
まゝにて念佛をい申らば。智者の智者にて  
申てしよた愚者の愚者よて申てしよた。  
道心ある人も申てしよた。道心なき人も  
申てしよた。乃至富貴のまゝも。貧賤のもの



之。慈悲あるも此の慈悲たるは是の如く。欲  
ふも是れも。腹ありきものも。本願の不  
思議にて念佛したるも申さしむべきものもこれ  
往生する如し。念佛の一願に萬機をたもて  
たう。後へる本願なり。たゞさうして機乃  
沙汰をんせしめて。福んくろよ念佛したるも  
申さしむ。これさうして往生するなり。念佛  
往生の義をかくも申さん人をい。

けやく本願を志すべし人とい心得あり。  
深空り身も。檢校別當たるをこれらわらふ。そ  
往生はせんども。これ法然房よりいへん志  
衆なり。さうさう習たる智恵ハ。往生れたる  
よは要しよを立ぬ。ゆへにさうも習たる  
志す。さうかもし。知たるにさうれさ  
事たり。浄土一宗ハ諸宗よ。いへ念佛一行の  
諸行よ。すぐきさうといぬ事ハ。萬機を攝



とるくはぬぬり。理觀。菩提心。讀誦大乘  
真言。止觀等。いづれも佛法のをるるにま  
すすといふ。あはれ生死滅度れ法をれども  
末代よかりぬきこころをよひ行者れ不法  
かりぬかりて。機つれよぬたり。時をいへ。末法  
萬年のくら人壽十歳よはばまら。罪をいへん。  
十惡五逆の罪人ぬり。老少男女れどもがれ。  
一念十念れたらひよひるまぐ。もしれ攝取

不捨のらひよひるまぐ。もしれ攝取  
諸宗よこえ。諸行よすれたりとい申たり。  
一臨終の一念ハ百年れ業よすれたりと申  
候。平生れらに臨終乃一念はこの念佛い  
申つてとまぐ候やんと。上人の終へく。  
具三心者必生彼國と。とらたれん。三心具  
足の念佛ハ百年れ業にすぐれし。臨終乃  
一念とれたら事なり。必文字れあるゆへり。



一念佛の行者毎日此所作よ。念をたつるを  
あり。又心よ念して數をたつる人もあり。口  
きを本らすべく佛やんと。上人のさるる  
口よられへ心よ念ぶる。たなり名号やれん  
いさもされ往生の業とみるへ。た  
佛の本願ハ稱名と立証がゆへよ。念よす  
るさかり。経よい。今聲不絶具足十念  
と記。釋よハ稱我名号下至十聲と判

強へり。耳にまこゆるほどを。高聲念佛と  
す。れり。但機嫌をさる。高聲とすべきは  
あ。地躰い。念よい。ちんとねよべたなり  
一餘佛餘經よ。けき。結縁助成せん。雜行  
たる。佛やんと。上人のさる。變定往  
生。此信をさりて。佛の本願よ。乘してん  
よ。他の善根よ。結縁助成せん事。また  
雜行と。た。往生れ。助業と。た。















門の修行の愚癡より入りて極樂入りじやある也。  
心得ありしこそ侍られり。はりて本國より入り  
ていづくそれ徳をかくりして番匠を藝能と  
志て世にふる家よりいづくもいづくも  
隆寛律師配所よりわじりし時當國より  
けの國府といふ所より逗留せしれたりたり。  
近隣の地頭とも結縁のためにきつたりあり  
まれぬにこそてもこれ國より蓮華寺といふ所に

禪勝房と申し志りや侍りたり。つひに  
そこのよいからべきし志り更よれはえ侍り  
番匠よて禪勝と申しれし侍りこと申に  
いつにえあやしく侍り。状をいりてたつ  
ころを侍りんとて。ふと候りてはついで  
たりたり。こも候ひしきりて。あらあへど  
とくしりまじりし。律師庭よれり。侍りて。候  
らりて。ひまの候り。たぐひよ。たぐひ候り。



して。往事をわすれさるる。目来あれは里  
思ひの。武士こそ。目もあやよとら。律師  
申らさるは。いに故上人の位よ。禅勝房ハ  
身いらり往生すべまをれよ。い。た。ま。ま。ね。り。と  
了。そ。ら。れ。無下に。あ。ら。う。い。て。い。ち。く  
す。う。た。ま。う。ん。い。て。ま。づ。い。ち。う。の。り。と。め  
申。れ。を。い。た。は。せ。ま。う。い。り。い。ち。れ。た。事  
たり。そ。り。つ。れ。た。よ。ふ。律師よ。い。ち。う。り。あ。ら。う。

かに見をく。れ。ら。律師れ。弟子ごも。い。ち。に  
を。ら。て。た。よ。く。あ。ひ。い。て。ま。ら。ま。る。ま。う。よ。  
た。に。事。に。て。を。御一言を。う。ゆ。ん。と。申。れ。い。  
志。う。い。れ。も。の。い。ち。う。り。な。ら。た。ら。も。  
い。ち。う。り。あ。ら。う。を。の。く。念佛つ。ひ。よ。申。を。  
く。せ。れ。ま。う。て。往生。し。給。へ。そ。の。給。を。其。後。ハ  
國中。れ。貴賤。た。う。い。ち。あ。ら。ん。れ。い。番。匠。に。て。も  
え。れ。い。ち。念。佛。の。化。導。を。い。ち。う。り。侍。せ。り。



此は志なり申されざるは。浄土宗の學問の所  
詮は。往生極樂也。やと此事と。ころころはあてが  
大事なる也。庵と。心得つらんやと。ま  
事なり。まことに近代の學生は異義をもち  
たり。聖教甚深なり。れも邪正とまよへり。  
但上人の位より。これ事い。ちりた。とて  
の強を。けりて或人。往生といふ。強。思定  
ふ。きて。侍。と。これ。たの。妙。を。た

こゆにて。い。ん。ら。は。は。は。  
おほえ。と。申。を。ま。て。強。て。あ。な。あ。は。  
やと申されたる。い。て。い。は。れ。よ。す。ま。て。何。と  
思。ふ。め。は。侍。と。申。を。ま。て。生。あ。い。の。く。  
死。よ。歸。ん。ど。り。は。よ。一。定。と。思。れ。ま。は。と。ゆ。  
にて。い。ろ。こ。ゆ。を。い。ん。を。の。は。い。と。い。く。ま。  
事。を。あ。い。ん。ど。り。と。い。う。申。は。れ。る。世。の  
こ。い。ろ。わ。一。向。稱。名。れ。は。る。更。り。他。の。は。い。ん



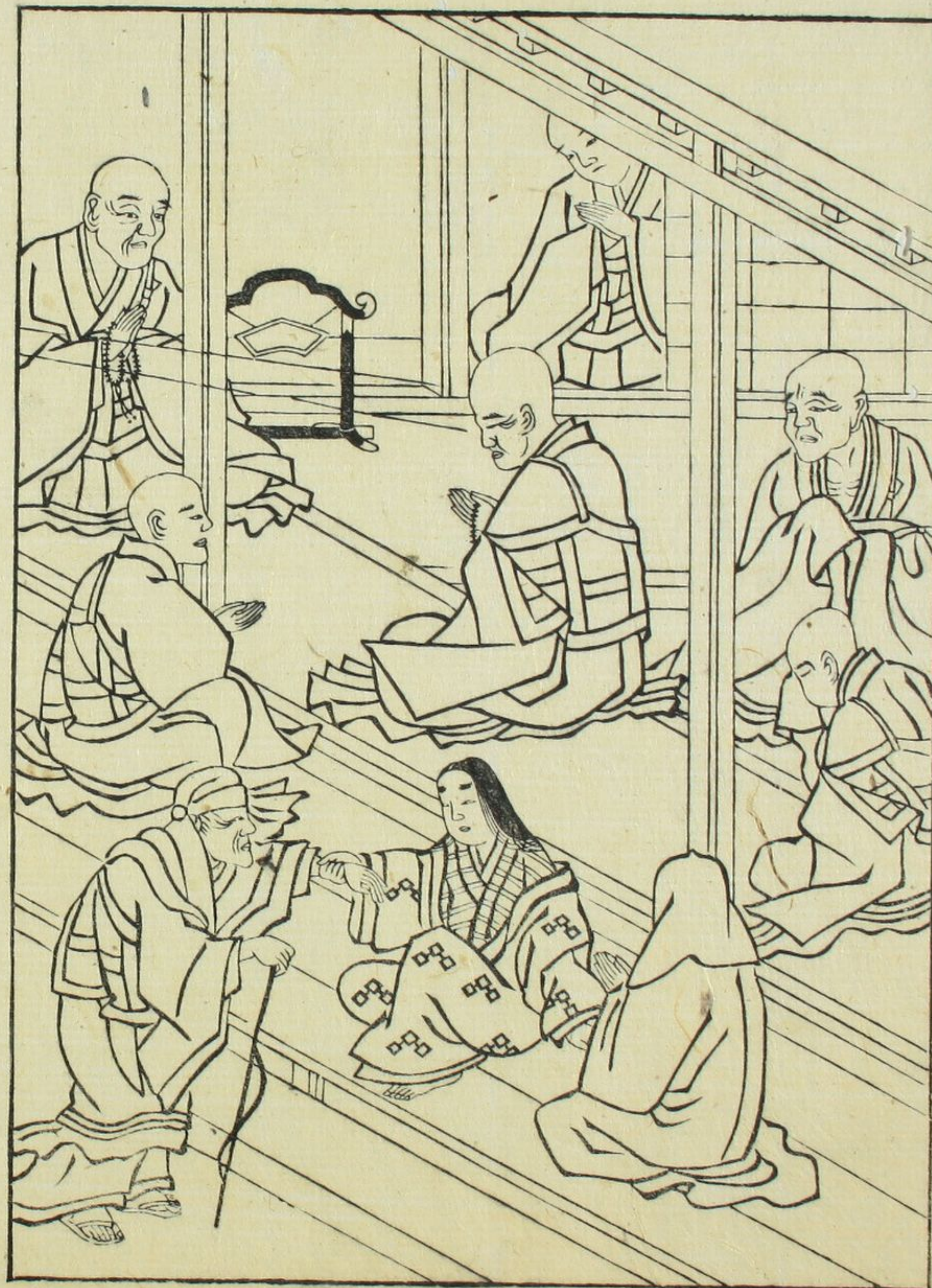
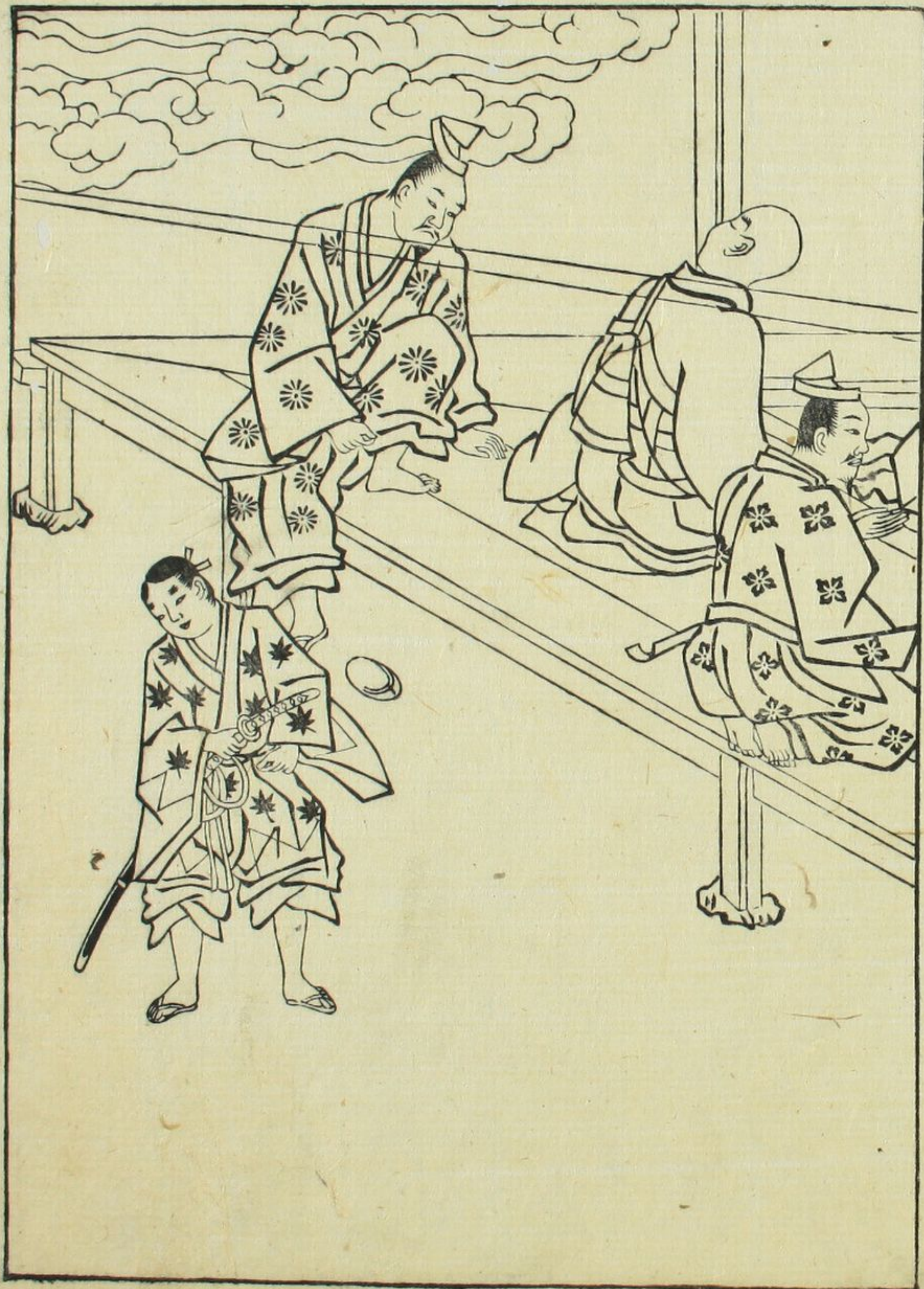
114



たうりま。生年八十五歳。正嘉二年九月より。  
すうさひら病惱びやうの事あり。死期しごよこさだだい  
事五六日。上人を拜まうしたてまつる。十月三日に  
成いぬ尅こくよ。蓮華れんげのうらぬらんくこれをこよと  
いも。又たいいまま迎接ようげの儀式ぎしありと志しんん。  
寅尅うしんれんめいにいてわて。観音くわんおん勢せい至しとてよ  
きこらら孫そんへまとてたま居いて端坐たんざ合がう掌しやうし。  
高聲念佛こうせいねんぶつ三さん反はんしてをらら飯いさる。正嘉二年

十月四日寅尅うしんたうり







俊乘房重源しんがふりゅうじゅうげんの上の醍醐たいご乃なり禅徒ぜんとよて真言しんごん乃なり  
 薰修くわんじゆつゝ里々りり上人の徳とくよ歸きして往生じやうじやうを  
 祈いのふ。師資しそ此禮こゝろをあひくゞり此こゝろ々々大原おほはら乃なり  
 座主ざしゆ上人じやうじんと法談ほふだんの時とき之の門弟もんてい三十餘さんじゆじゆ人を相あひま  
 率りつして。此座こゝろよ攝しやくす。此こゝろま。治養ぢやうやう此こゝろ逆さか  
 乱らん。南都なんと東大寺とうだいじ焼失やうしつ乃なりあひひ。此こゝろれい志しを  
 えちて。大勸進だいくしんの職しやくよ補おぎなす。とゞく。り  
 造管ぞうかんをくゞり。工たくみの器用きやういゆうをえり。ん



四十五  
 三三







人なりを此にぞれしるるにこそしむにこそ度  
第一しんちゅう後乗房とて人申々る。備前周防兩國を  
たまひりて造営此切込をへ建久六年三月  
十二日供養はらふる。天子行幸ありき。  
鎌倉此右幕下。結縁乃ために上洛都鄙  
群をたひて嚴重此法會なりとら。十一間  
二階の大佛殿。金銅十六丈八尺の盧舎那如來。  
同時にいらたて。こがまいびとまこらん。たか

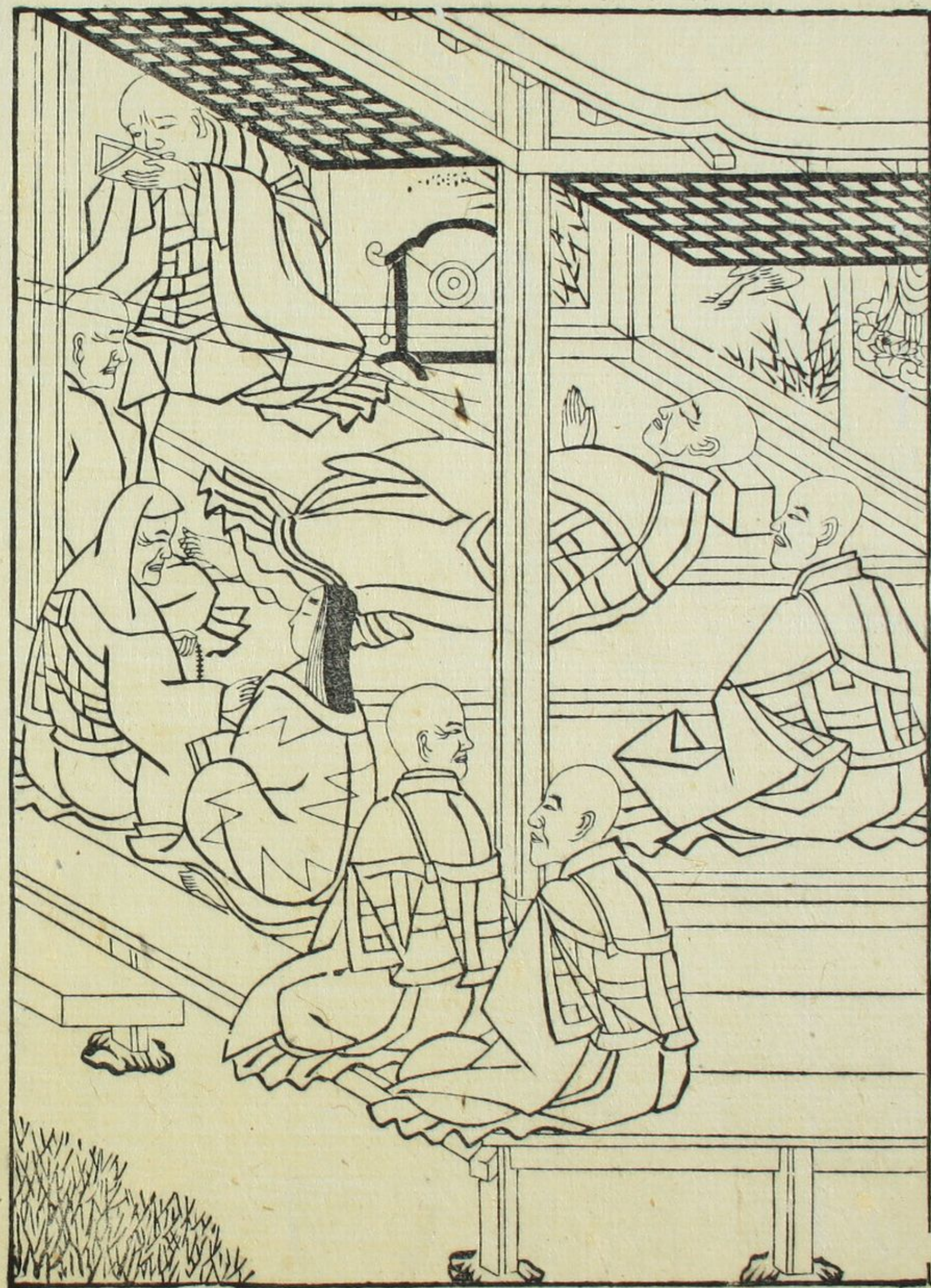
らけれ心をまきてみろいづらふゆき事なり  
あつはらとん建久三年十一月。當寺がうひて  
供養此御願文 六角中納言親經卿  
の草也干時參議 よそだびらに  
あつはらとりのさして侍り。上人の勸化よ  
まろいひく。念佛を信仰此あまわ。此故山と此  
醍醐。無常臨時此念佛をす。えて。未代乃  
恒規と。それらう七箇所り。不斷念佛を  
興隆と。此東大寺此念佛堂。高野山此



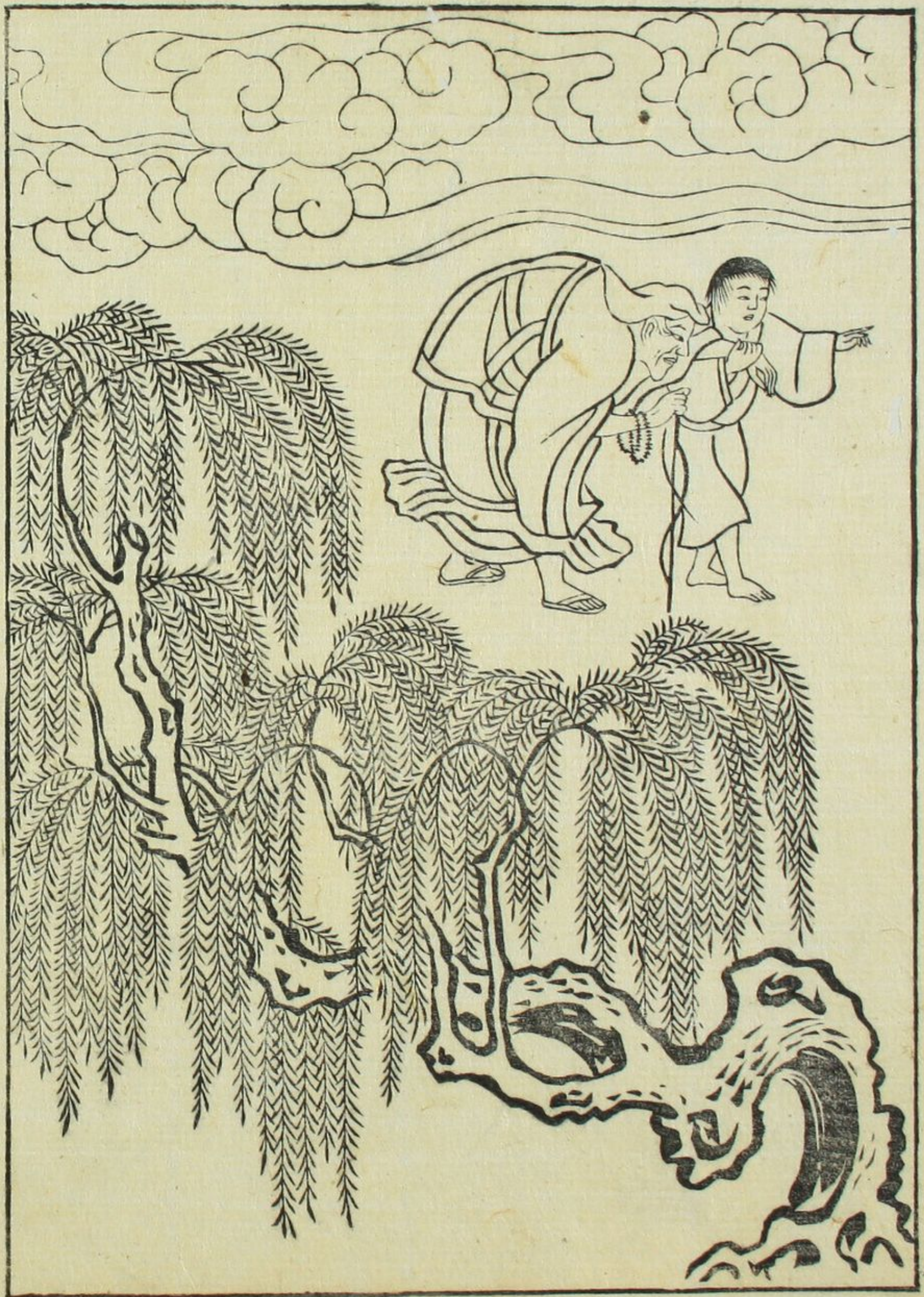
新別所等しんべつしよとうに於たり。それ法とせん。もつたえんは  
とちんうんまらふ。このひぢりしんねん若年れじう。  
天狗てんぐよろしくれて。あつ所へたり。たごころを。  
これに於てす。あつ。おほまる。利益りやく返り。さん  
ごころ。人たのち。す。もつた。ゆ。す。く。こ。ご。ご。の  
天狗制てんぐせい一申。な。る。よ。あ。り。て。あ。つ。は。ま。に。な。る。  
より。申。は。し。り。て。侍。り。そ。れ。詞ことばも。ご。ご。り。あ。る。  
不思議ふしぎ此事このことなり。建久六年六月六日。東大寺に

して。な。ら。む。返。ら。る。れ。よ。な。る。と。な。り。









法然上人行状畫圖第四十六

鎮西ちんせい北きた聖せい光こう房ぼう辨べん長ちやう  
又号ハ筑ちく前ぜん國くに加か月げつ庄しょう此人

なり。生年十四歳さい。天台宗てんたいしゆ法ほつ学がく。二十にじゅう二に歳さい。

壽永二年じゆえい北きた春はる。延曆寺えんりやくじにのりりて。東塔とうたう南谷なんこ

觀くわん穀こく法ほつ橋きやうの室しつにいる。のちに寶地ほうぢ房ぼう法ほつ印いん證しょう

真しんよにけんて。一いつ宗しゆ乃の秘蹟ひせきをしけ。四明しつめい北きた真しん義ぎを

ままいいし。廿九歳にじゅうきゅうさい。建久元年けんきうげんねんに故郷きやうにかへりて。一いつ寺

山やま乃の学頭がくとうに補とと。三十二さんじゅうにのご。世間よの無常むじやうを



はらりく無上道心返た。今生乃名利を  
すく。身乃ら此資糧をまじ。建久八年  
吉水此禅室よ参ると時り上人六十五辨阿  
三十六ちり。いそくにたをく。上人の智辨ふ  
一といぬもだんぞわが所解にとぎんやと。  
ころくに浄土門此樞捷をたぐ。上人こ  
へての南も。汝天台の学者たれん。とて  
かゝ三重此念佛を分別してきく。めめ。

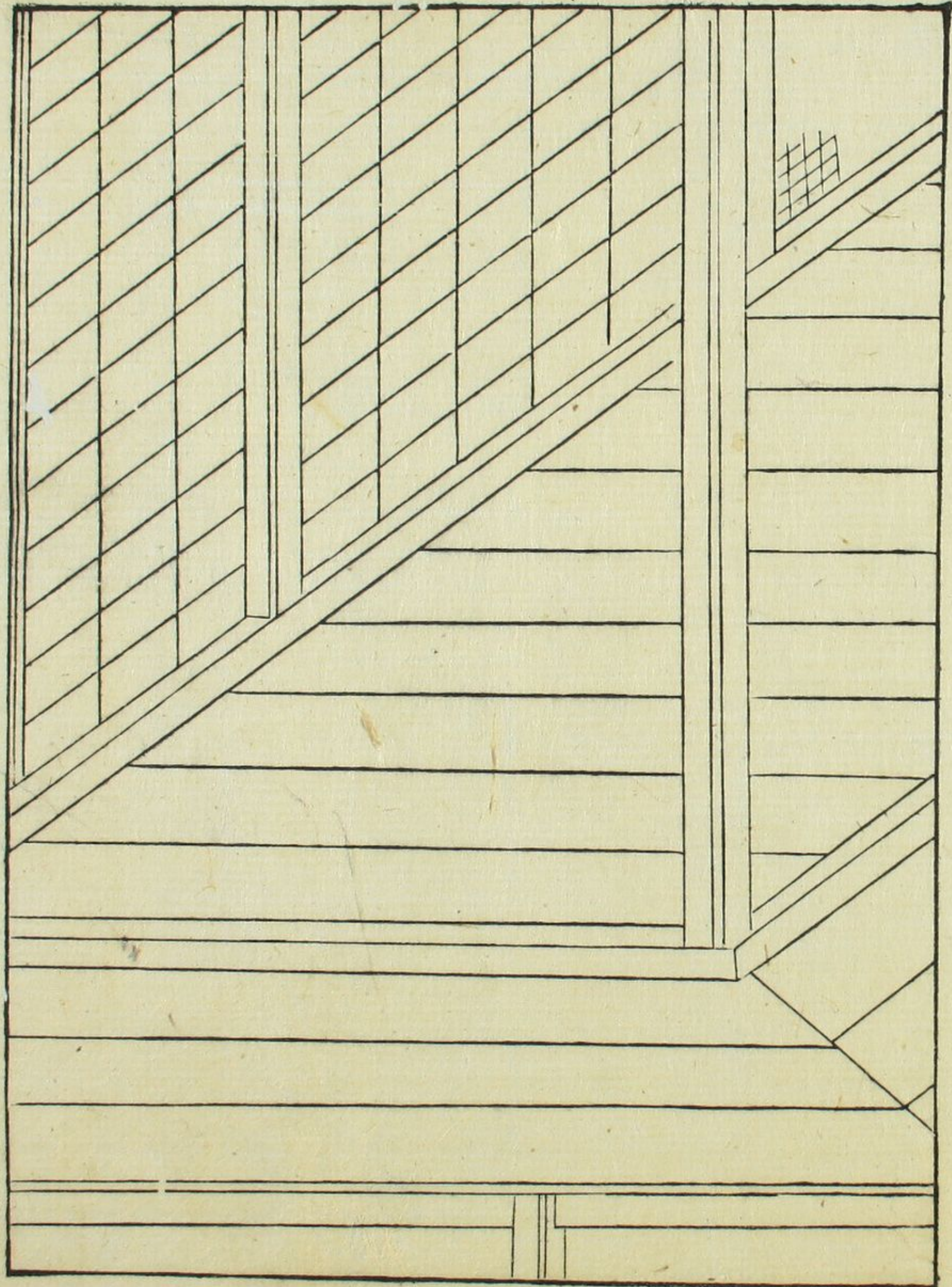
一よハ摩訶止觀よあは念佛。二よハ往生要  
集よすくじる念佛。三よハ善導乃立教の  
念佛なり。こて。わく。これをのたすめ。  
文義廣博よりして智解深遠なり。崑崙乃  
い。きをあく。蓬瀛此をの  
そく。たり。い。子此時りい。  
また演說數尅よをよぶ。これをまきり。  
高峯此心や。渴仰此思い。また九丈



解脱げだつの直路ぢきろハ浄土じやうど乃一門いちもん念佛ねんぶつの要行ようぎやうハ志し  
ぢぢぢぢと信解しんげして。だゞと上人じやうじんノ師しと  
事ことへて。暫まづも座下ざさを止とむ。ひさし一宗いちしゆ後  
習学しゆがくして。はぶさに庭訓ていんをうたふ。此こゝぢぢ  
翌年よく建久九年けんきうくわんねんハ春はる。上人じやうじん選擇集せんたくしゆを聖光房せいこうぼうに  
止とめたる。此こゝ月輪殿げつりんどのハ任まかせよ。あつて。えん  
處ところ多おほし。いさ。披露ひらよ。及および。い。い。へ。も。  
汝なんぢハ法器ほふぎレ。傳持でんぢし。う。た。り。や。く。此書こゝを

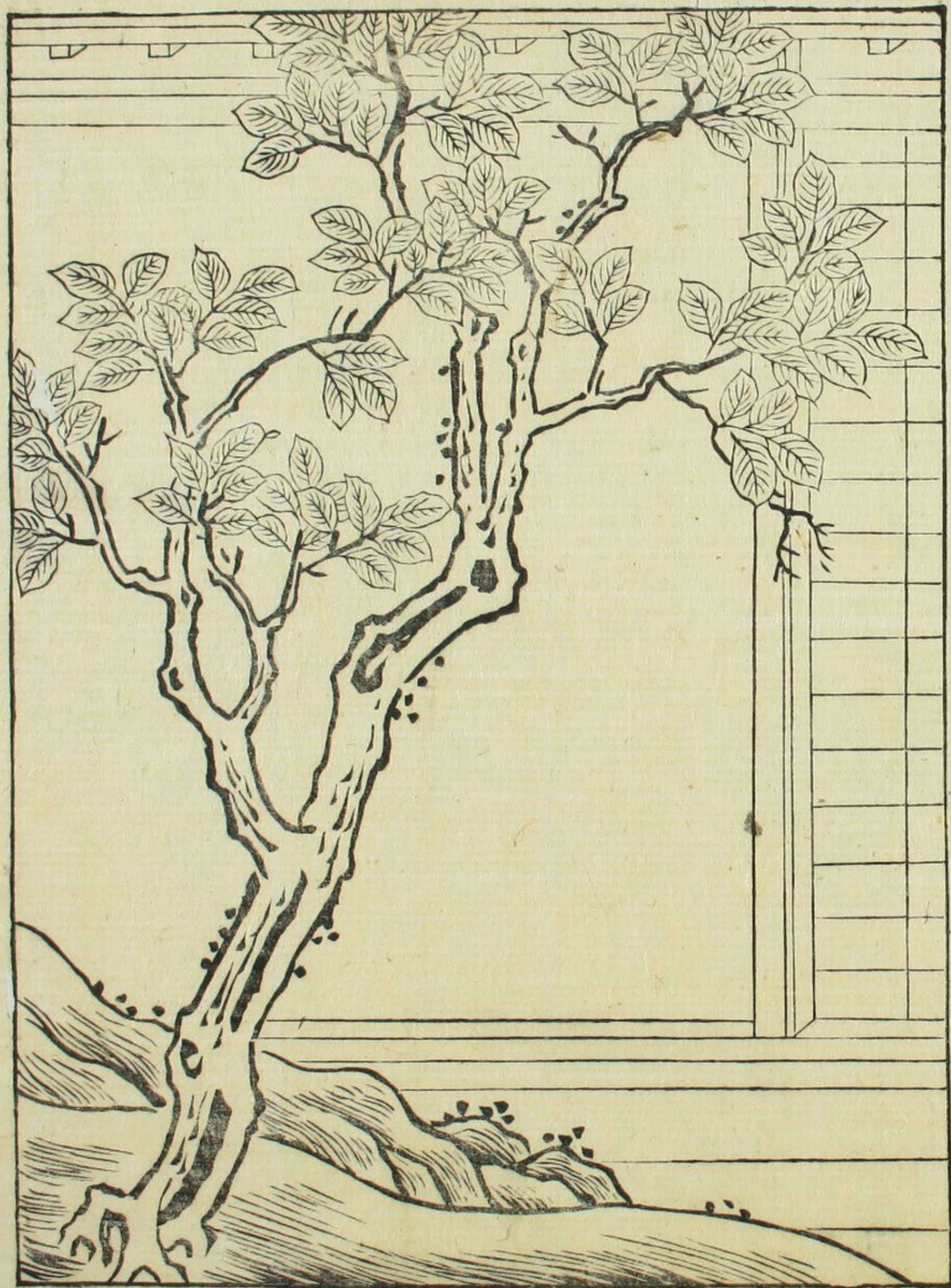
う。い。へ。て。末代まつだいハ。ひろ。び。あ。つ。と。信しん。し。此こゝを。志し。  
か。け。れ。く。頂戴ちやうたいして。う。た。ふ。我われ大師だいし釋尊しやくそんハ。  
た。法然ほふぜん上人じやうじんハ。あ。つ。と。た。と。い。申まを。此こゝを。同  
年八月ねんはつがつ。上人じやうじんの嚴命げんめい候まを。う。た。て。豫列よれつ。よ。下くだ。  
念佛ねんぶつを。す。じ。その。他た。よ。ま。つ。ふ。を。此こゝを。志し。  
死し。と。又建久十年けんきうじゆねん二月にがつ。歸洛きらくして。上人じやうじんノ奉たて  
仕つか。と。と。此こゝを。う。た。ふ。元久元年げんきうげんねん七月しちがつ。い。い。る。ま。て  
六箇年むつかんと。寸陰すんいんを。た。と。して。釋文しやくぶんを。研覈けんかく。一。宗しゆハ





深<sup>しち</sup>真<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>。水<sup>みづ</sup>を<sup>を</sup>器<sup>はら</sup>に<sup>に</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>。







此のよき学なり功を成して元久元年八月上旬吉  
水此禅室を辞して鎮西乃舊里より入里  
浄土一宗を興せしむるよ。利益四遠よあよめし。  
こゝにある学者上人の門弟と号して云。浄土  
甚深の秘義ハ天台圓融乃法門よたれし。こま  
此宗ハ最底なり。又密これ口傳あり。金剛寶戒  
こまなり。善導の雜行を制して專修をす  
先師ハ志しし初心此行人のこめれしに

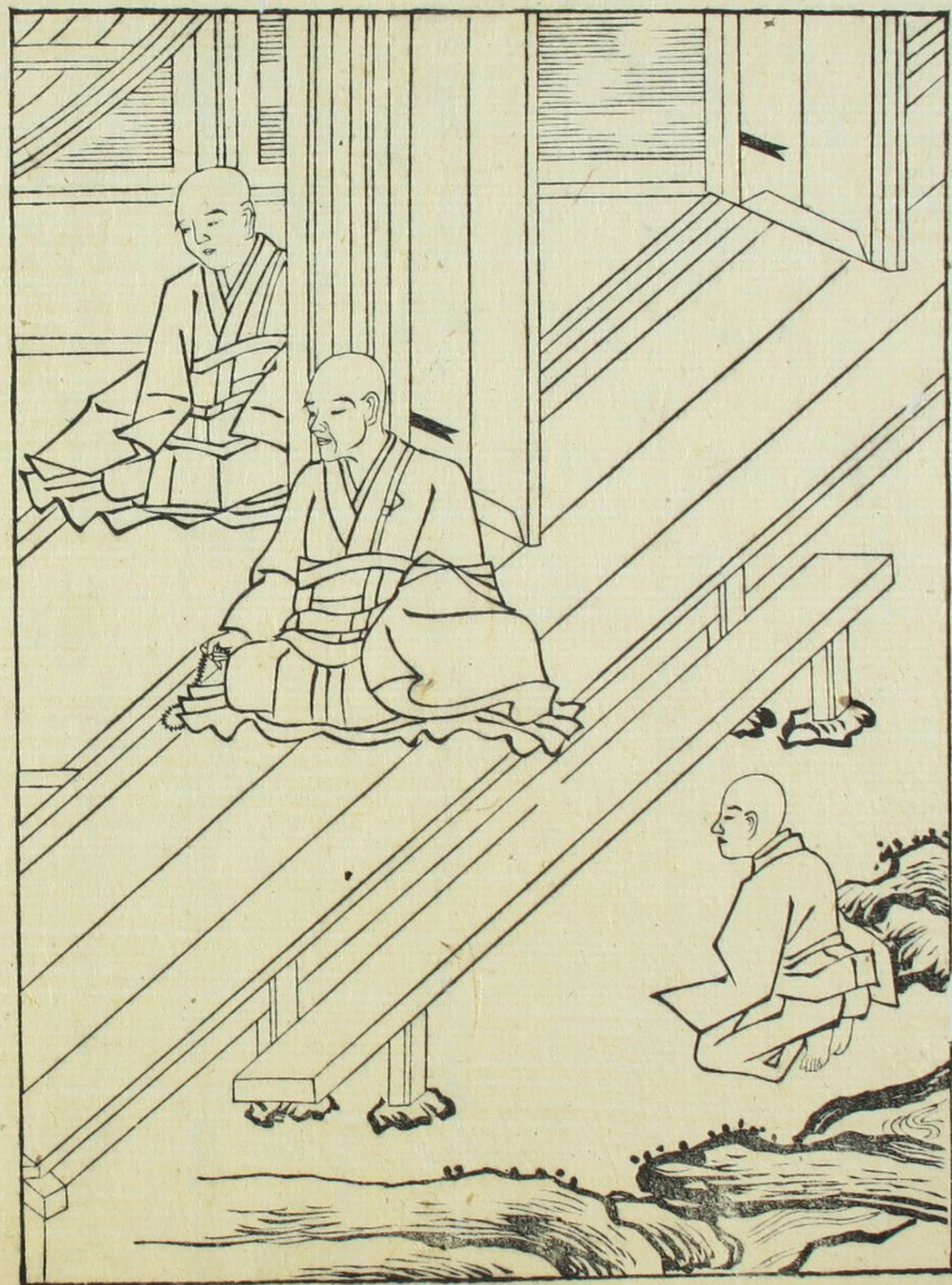
實義にあつた。此とれは上人の相傳あり  
こ。云。此真偽をあきめんとためし。元久二  
年三月門弟度脱房をたつていりて書状を  
上人に進むるに。件の兩條くりて。此は  
のせし。びり座下に侍し。漢家此先賢。  
浄土此法門を釋し。その義蘭菊は此と母。  
善導の御心ハ。称隨乃本願此專修正行。こま  
往生極樂乃正路。この宗乃元意なりし。



は祿よ位をうたふまはつりまふかくれごと  
まのこゝはまうは。こま機なを就せざ家ゆよ。  
御教訓を蒙らるるの。よく一家に狼籍をさめ。  
未代の念佛を印持せんがためよ。御在世れ記  
是非を交断し。御證判を於て專修の一行を  
たらんやとれり。取意。器抄。こゝにとんてづ。筆紙  
そめて彼状よ勘付せしめて云。已上二箇條  
以外僻事也。源宣全以如是事不申儀。以釋迦

弥陀為證。更如然僻事所不申儀也。云上人  
自筆此誓文。未代念佛此龜鏡なり。彼書いまはま  
し。世よあり。たもこ。我をう。うん。此相傳  
の義す。始も信受とるに。をさる者歟。







此ひ志り。安貞二年此冬。肥後國往生院より  
しして四十八日此別時念佛を修す此とき  
後昆乃異義をいまいめんうり。一巻の  
書を制す。此改未代念佛授手印と名づく。  
上人相傳れ義勢。此ぶさし。この書にのせたる。  
著述しをへてのち。善導大師まれあり。  
道場より影現し。強しあり。なわ。こまきす。此ら  
の始り。こゝろ。此法門の證明たるへ。ひ志り

こ此を拜し。して。げま。すぐ。よ。證を得たり。とて。  
感涙をた。り。此ら。又筑後國高良山乃ふ  
え。こ。一の精舎あり。厨寺と号す。丈六尊  
弥勒の像を安置す。聖光房。此道場より。て。  
一千日如法念佛を修し。強よ。八百目よ。をよ  
びて。高良山乃大衆會議し。て。い。當山ハ  
こ。真言止觀。此學地也。此山乃ふ。こ。て。  
專修念佛。勤行。こ。こ。此。此。此。



發向して念佛衆を退出とへしと。衆議し  
て。よらむいなるめく。明曉を期と。念佛衆  
これ事をまごして。すこやりに退出す。こりな  
申す。いひぢちのこまつく。汝等いふ。うし  
心もあらず。我いづくにいづく。後と。  
これうへにこれ退出の思をせめて。惡徒れ  
またるをまつ。福よ。ためいのほかに。一山乃  
大衆。色これ供物をけらげて。まごこわく

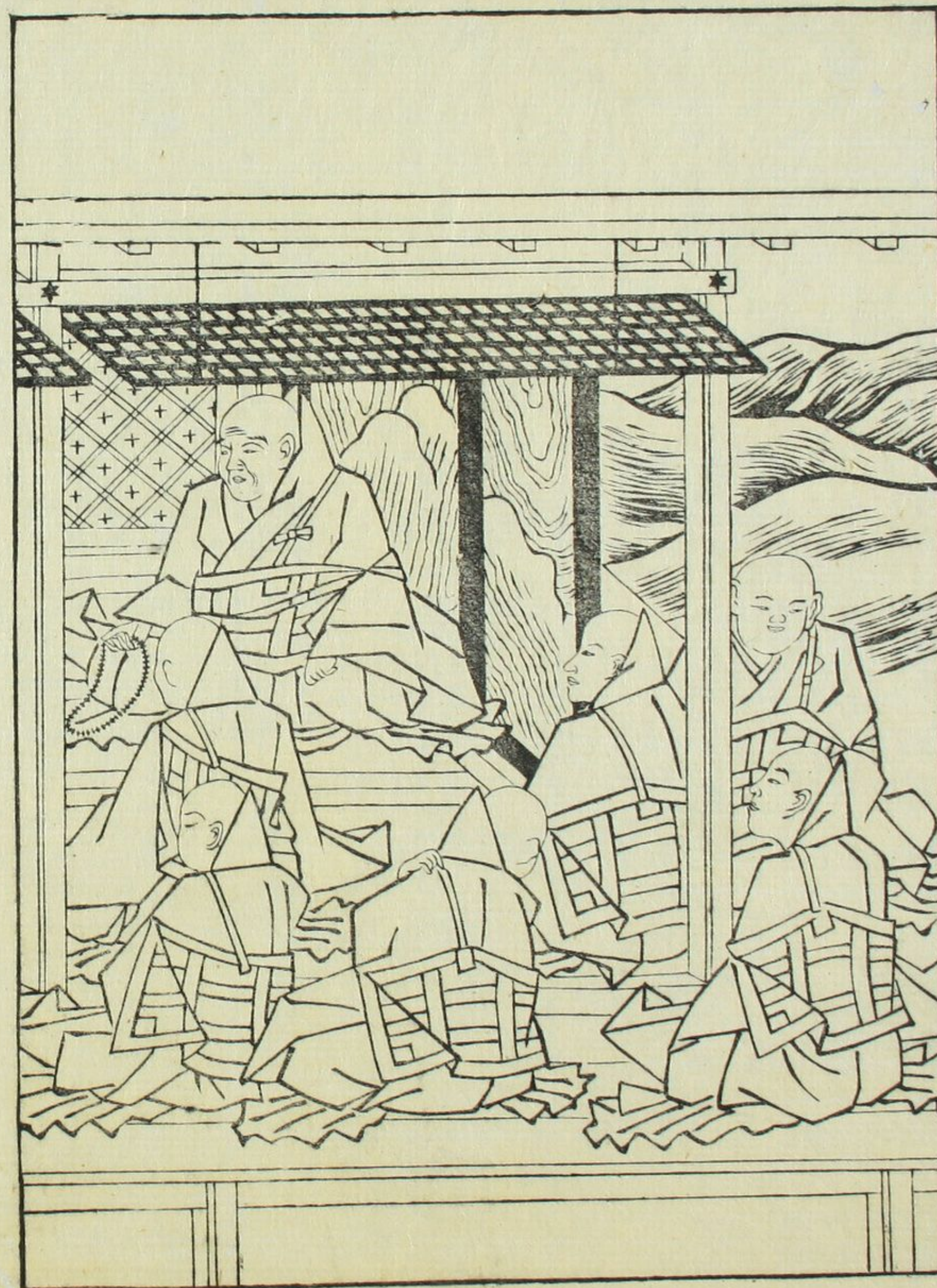
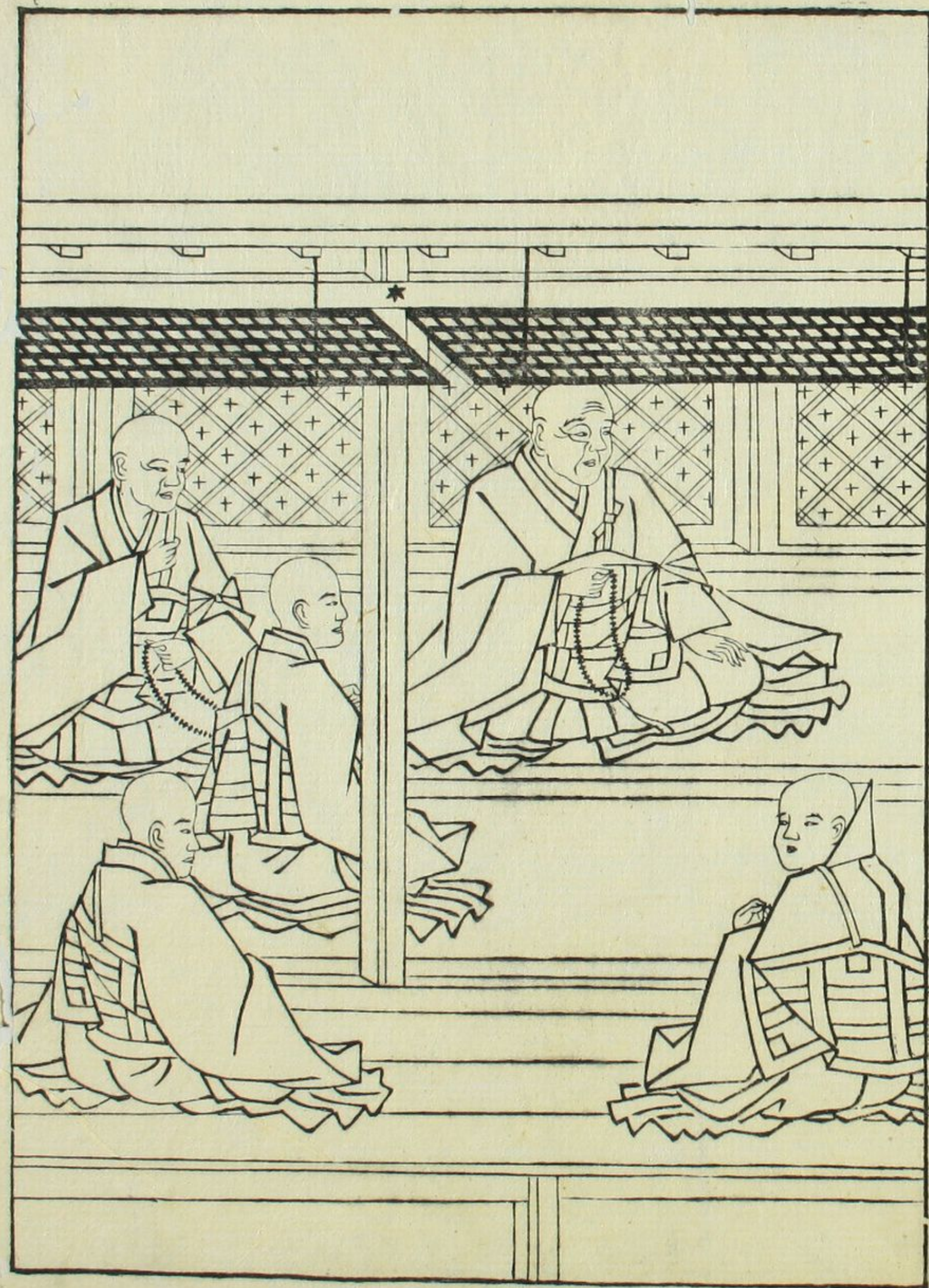
いづくも。れよ。念佛停廢の惡計をなすに。  
今夜。靈夢を感ずる。こらあり。赫奕たる  
光明の。よらむ。こらして。此道場をこらす  
あや。こらたづ。あ。こら。か。こら。人あ  
りて。いづく。聖光上人念佛を行とるゆへよ。  
これ佛ひ。こら。後。これらして。け。ひに。これ。ま  
り。こら。て。こら。た。ら。や。諸人の夢。一。同。なり。こ  
き。に。こら。て。これ。前。非。を。改。悔。して。慚。謝。の



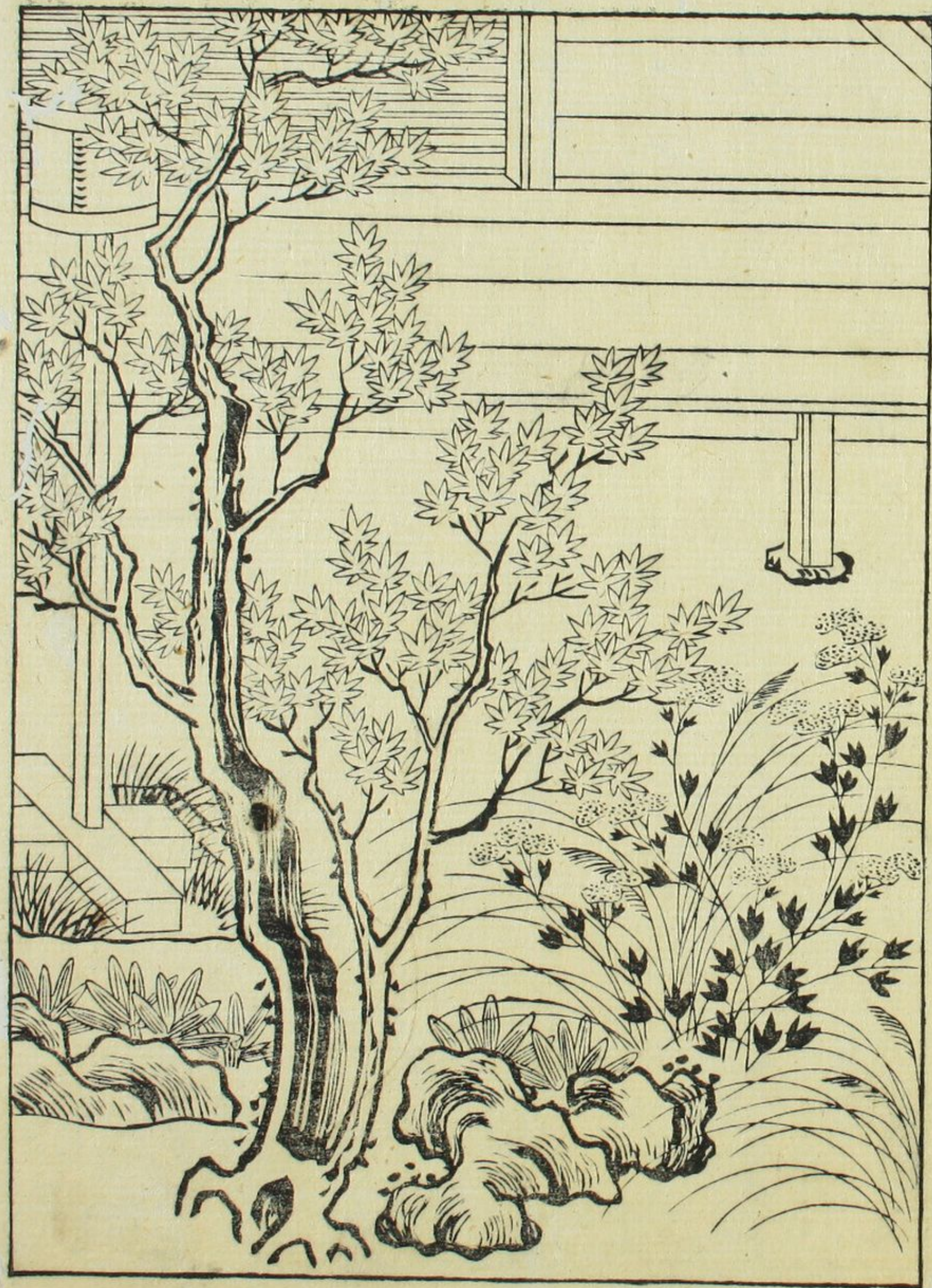


たゞの群衆とて。まよひのち。一  
 歸依をせし。四輩信心あり。

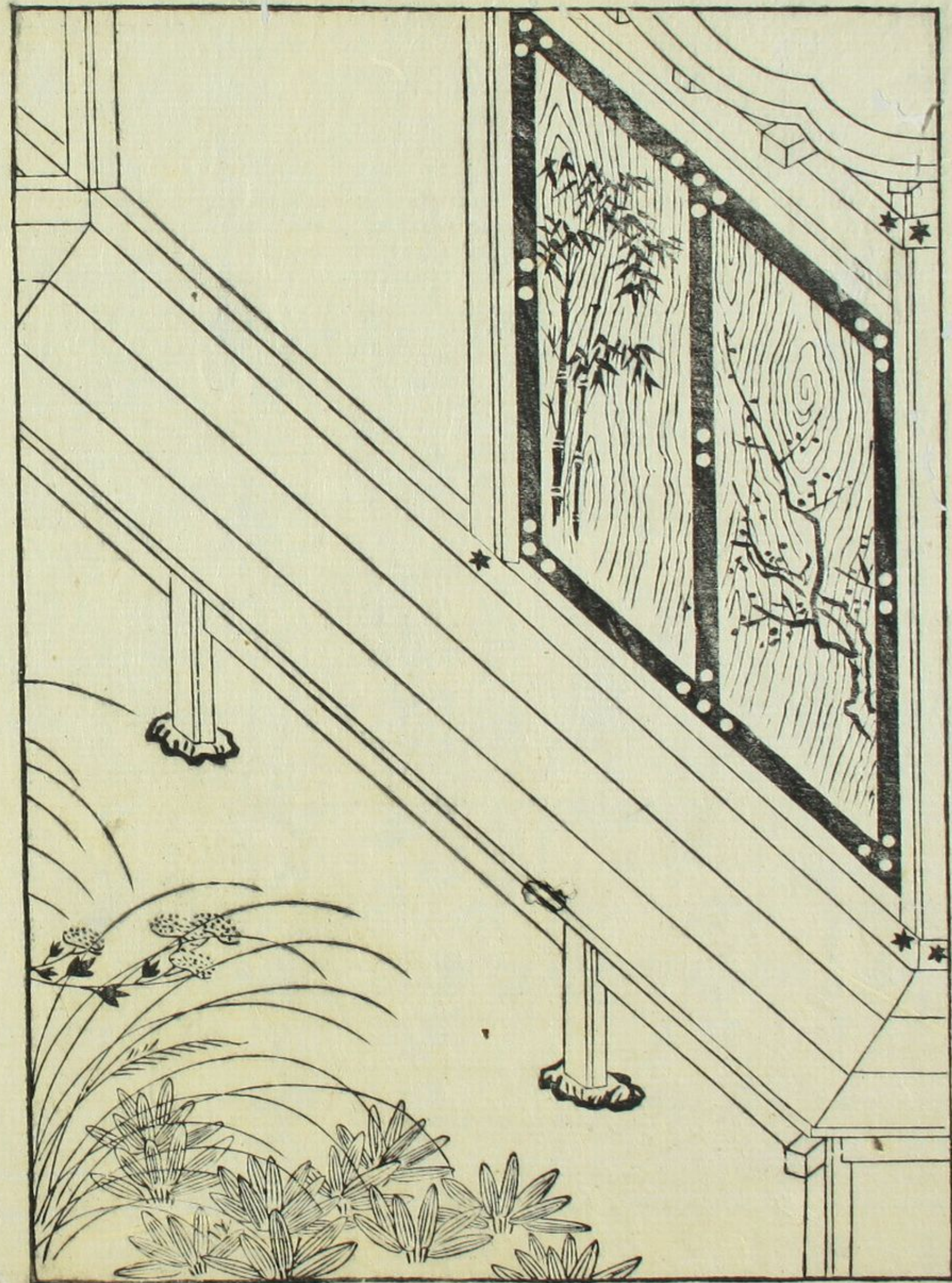








Small vertical text or seal on the left margin of the first page.



Small vertical text or seal on the right margin of the second page.







いまだたまたますけたまへ阿弥陀ほとけ。  
南無阿弥陀佛とぞ申されり。嘉禎三年  
十月より病惱。同四年正月十五日ひいれ  
尅門弟をあつめて来迎れ讚を誦し念佛  
すじ。聽聞れあひひ。隨喜の涙をわがして  
いも。極樂の聖衆。天よこらくたすへりこ。  
聞人奇特乃思をなると同廿三日たけの尅化佛  
来現し。殆より門弟に志免と。同二月廿七日

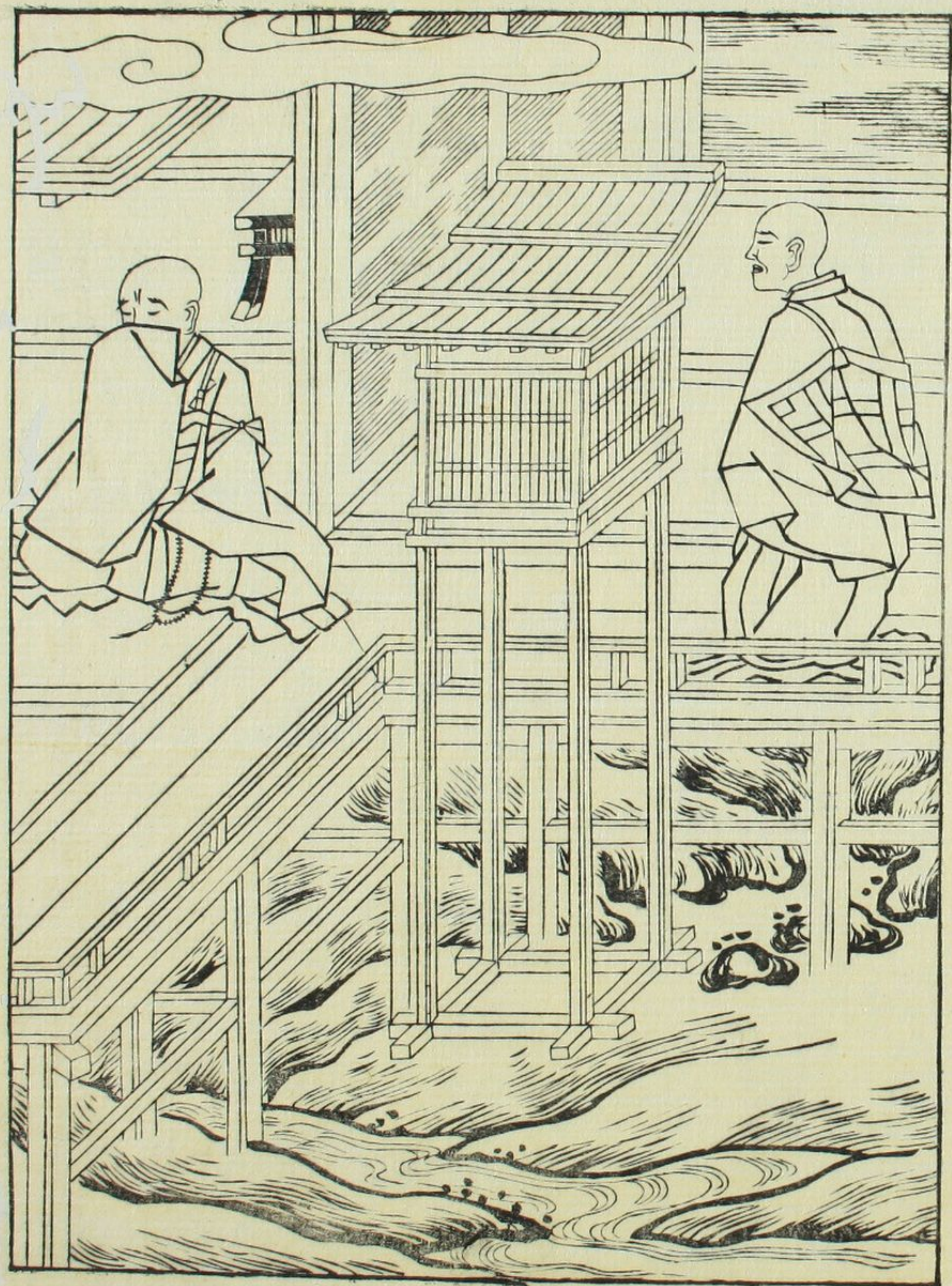
うしれごま。異香志きりよ。薰ど。同廿九日未  
尅七條の袈裟を着し。頭北面西よりして。五色の  
しるしをひくへ。平生れ發願よまうせて。一字三  
禮の自筆れ阿弥陀經を合掌乃母指よこし  
し。しるして。念佛すること一時ぐわ。最後よ  
し。に高聲よこれへて。光明遍照とて。いま  
はぎれ白よこし。ごるよ。祥ふるがこして。  
寂り歸と。春妹七十七。夏藤六十四なり。



命終の時よありて。五色の雲天よとびま。  
又紫雲たつめにいはるをおほぬ。道俗群集  
志てあまひくこれをおほ。又入滅の翌日あり。  
上妻聖の天福寺舊居乃本房れうへ。紫雲  
たれびくこと三箇日。村里よんる人おほく。  
又臨終乃きけとぞどなくよら。紫雲よ  
ねごろきて来て。入滅よあふとぞあわ。  
又草野の郎等たりたるもれ夢に當寺に

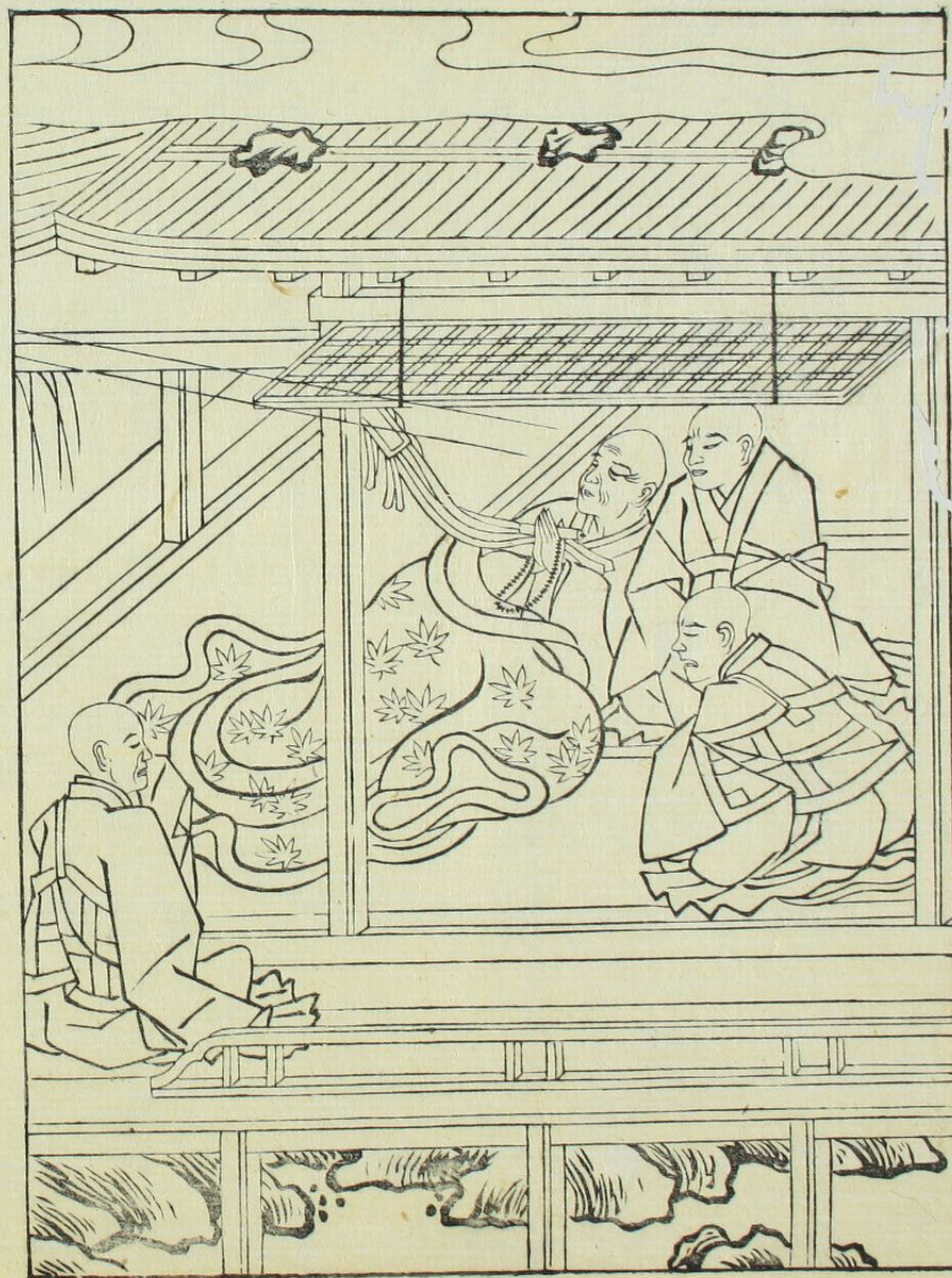
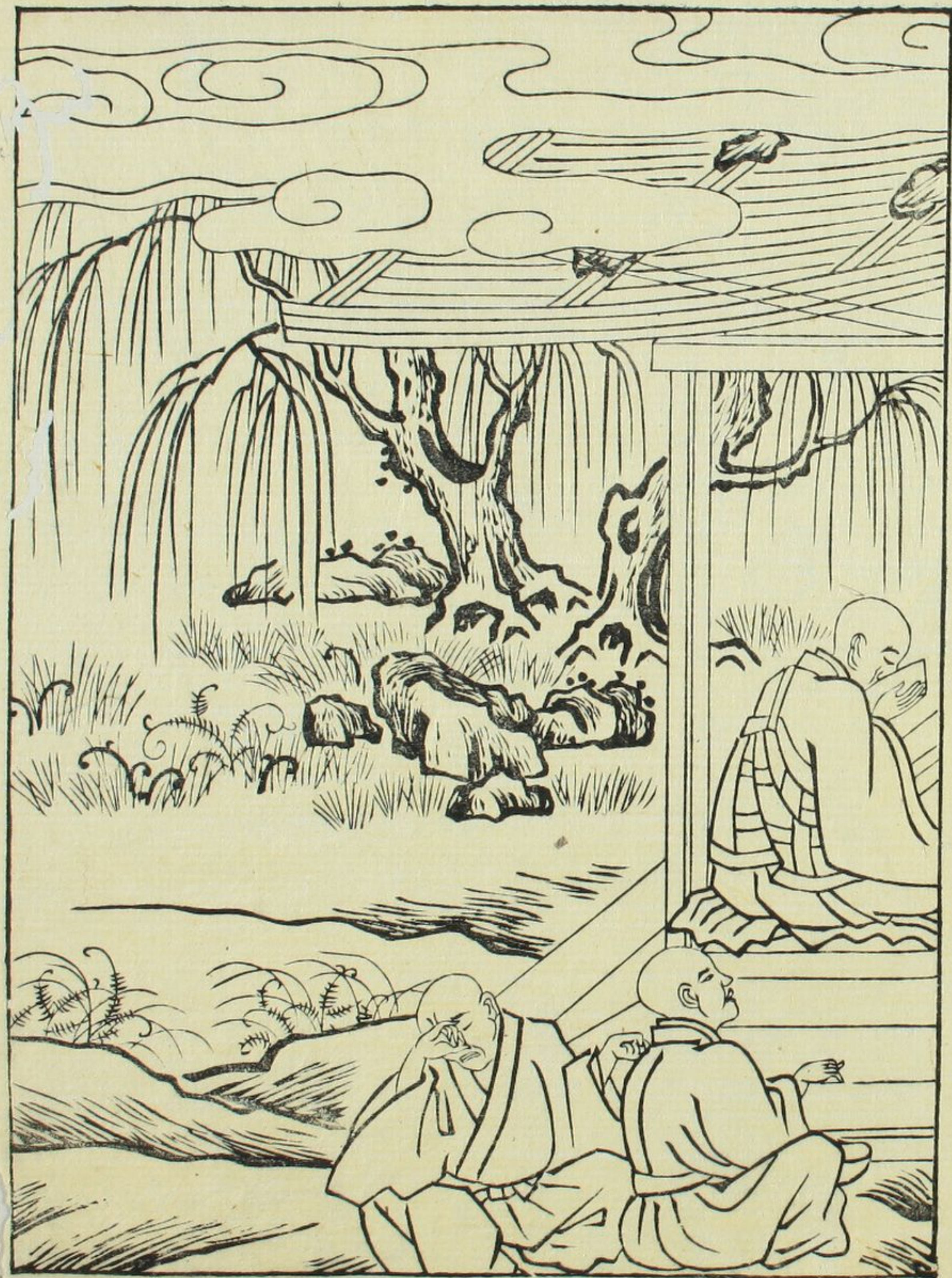
迎講ありひちり。手に金字れ阿弥陀經を  
もちたまへと見てあめぬすれら往生れ  
よをききて。いせまうりて入滅の儀を拜  
するに。げらにゆえ乃所見よたがひく。  
ふく隨喜一々里。まのそたは平生れ  
祥瑞終焉れ靈異。それとぞれつれり。  
あふいませあり和尚を拜一。あふい  
あふたよ弥陀をえとぞつら。或ハ極樂の





依正目此よりよ現し或ハ釋尊の光明身を  
 うへをてらす。又門弟敬蓮社ハ遊めに師ハ  
 こ此善導の再誕なりと見えある人の跡隨乃  
 垂迹たりと見る。これこそまろ奇瑞と此  
 う流ありといへども。志がたれよよちてのそと









うれ製作さいきの念佛往生修行門しゆぎんよ云。世れ中の  
 念佛者。故上人ごにんれ御流ごりうとい申あひして侍まじり  
 上人の御義ごぎよいたりり一い事こととを申まり  
 侍まじり不便ふびんれ次第しだいよ侍まじり故こ上人ごにん辨わ阿あり  
 存ぞんへん善ぜん導どう乃の御心ごこころハ浄土じやうどへまりんと  
 ねをりんいの如ごとく三心しん具ぐ足たりして念佛ごぶつを  
 申まりしよ至誠しんじやう心しんと云いますことといふ  
 往まりんとれりしりて念佛ごぶつを申りしよ



深心と云い。我身の罪惡生死乃た去らざらん。  
志るに。弥陀の本願乃たかくおれまじよ  
して。これ念佛より外よ。我身のたすうる  
處まじくおれ。かく信ずるは申也。三に  
廻向發願心と云い。あまひらすむらに。極樂小  
まゆんどるたえの念佛たわお思をいぬ  
たわ。こまど。法然上人より習はるへあして  
ちつちたる三心よして信ず。これ外またえ

別のやうたも也。故上人乃た罪ま供へ  
在家れいとあまゆらん。一萬二萬たを  
申へ。僧尼妙妙とて。あまをへたらん  
ま。よは。三萬六萬たを申へ。い  
くよえねほく申にすぎたる法門ある  
處。次。詮とるこ。此念佛の決定往  
生れ行たりと信をとりぬ。道人自然り  
三心の具足して。往生すこと。あま



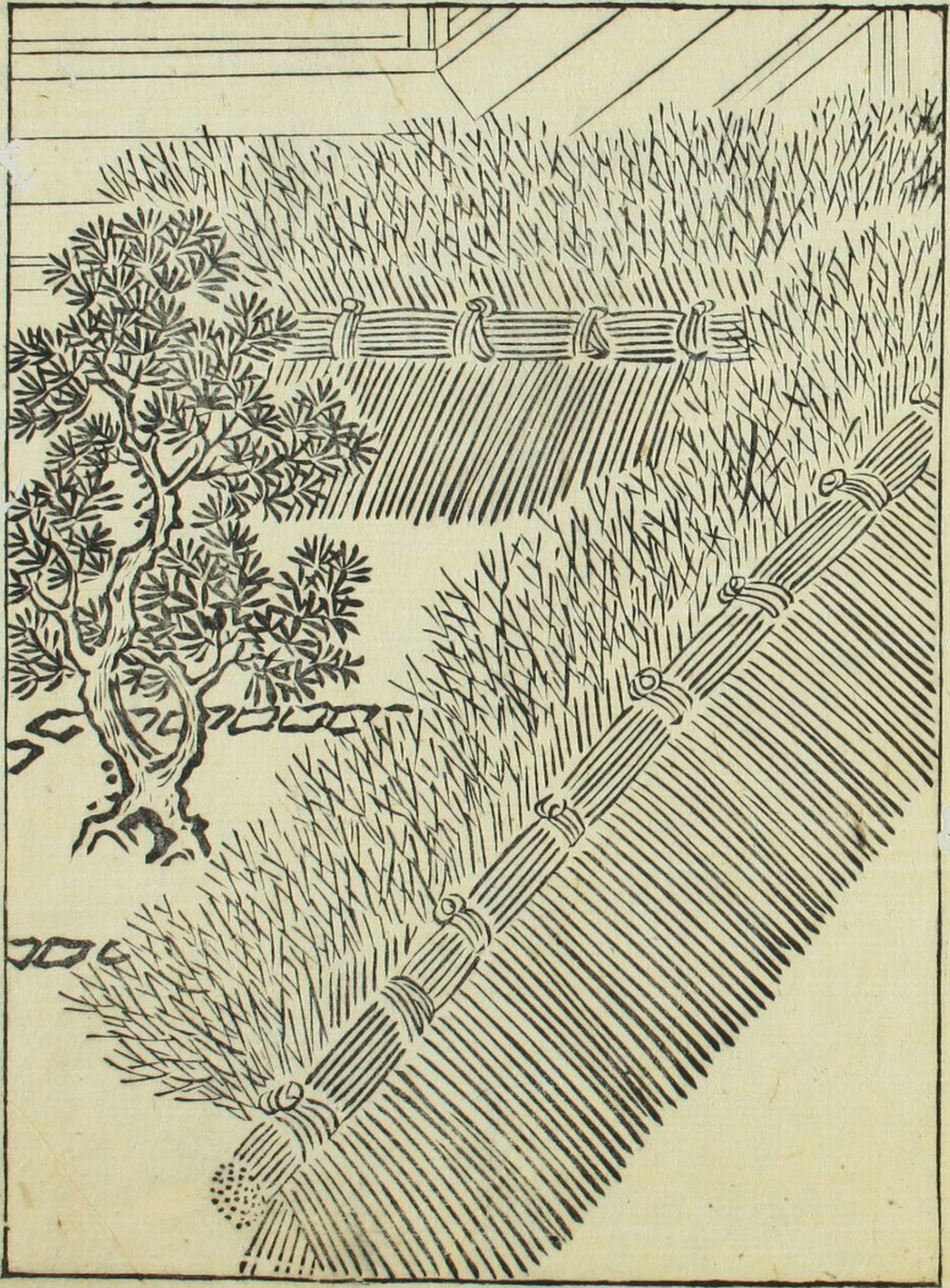




流濁乱義道不似昔不可說佛御邊一人正義  
傳持之由兼及佛返本懷佛喜悅無極  
思於佛必遂往生本望可期引導值遇緣佛  
者也以便宜捧愚札御報何日拜見哉他事  
短筆難盡佛云其後文永此比聖光房附  
法弟子然阿弥陀佛と勢觀房の附弟蓮寂  
房と東山赤築地にて四十八日此談義をん  
る時然阿弥陀佛をよこしくして。兩流を

校合せぬまをて。へうして違ふところ  
たうわろ此も蓮寂房此云日比勢觀房此  
申されし。いよいよ符合しぬ予  
門弟よをきてハ。鎮西の相傳をもて我義と  
すへ。はれよ別流をたけぬへうして。こ  
まよらわて。此勢觀房の門流ハ。これ鎮西の  
義に依附して。別流をたてけしと受け  
たまはる。それ外安居院の聖覺法印。二尊院此





正信房たゞも。り。義れあやまらぬ證誠  
 よい。聖光房を。し。て。申。す。れ。は。ま。だ。當。世。筑。紫。義。と  
 号。す。る。い。は。れ。聖。光。房。れ。流。よ。て。傳。は。せ。り。



